

「そなえよつねに」 青少年団体への提言

「子どもの頃の被災体験を語る」



子ども・若者防災研究会
(兵庫県青少年団体連絡協議会)
(公益財団法人兵庫県青少年本部)

目 次

I、はじめに	2
II、提言	3
1. 話を聞こう	3
2. 本を読もう	3
3. コミュニケーションしよう	4
(1) コミュニケーションは命を守る	
(2) 団体活動でのコミュニケーション	
(3) 地域でのコミュニケーション	
(4) 地域で指導者が行うコミュニケーション	
(5) やっぱりコミュニケーション	
4. 街を知ろう	5
5. 道具を使おう	7
6. 五感を鍛えよう	8
7. 避難訓練をしよう	10
8. 一人で生活する体験を重ねよう	11
III、子どもの頃の被災体験を語る会「記録」	12
1. 各会場での流れ	12
2. 参加者名簿	13
3. 協議した報告内容	14
IV、実行委員会メンバー	19

I、はじめに

ひょうご安全の日県民推進会議の助成を受けて、下記の目的を達成するために兵庫県内の 3 会場に於いて「子どもの頃の被災体験を語る会」を開催し、経験を語り継ぐ大切さと防災・減災に向けた提言を行い、青少年団体や地域社会に提案する冊子「災害に備える」を作成し、準備を行うことにした。

1. 目的

子どもの目線で被災状況を確認することにより防災意識が高まる。また、子どもも地域の一員として役割を担うことが出来ることを大人社会が共有する。

さらに、今後に備え、子ども・若者の力を地域に生かすために、今何をすべきかを提案することができる。

2. 内容

阪神淡路大震災では、子どもも様々な取り組みをした例はあるが、どちらかといえば子どもは一定の役割を担う地域力の構成員であることが意識されず、傍観者として見られてきた。そこで、当時の子どもやリーダー、指導者が当時を振り返り、子どもも一人の地域人として活動するには何が欠けていたのか等を検証し、検証に基づいた研究を行う。また、今後の災害に備えるためにどうすればよいのかを団体や地域社会に提案する。

東会場(神戸)、西会場(姫路)、北会場(豊岡)のそれぞれの会場で震災や洪水などの被災体験について語り合い、3 会場に参加された委員の皆さんそれぞれから体験談や事前の備えが必要なことなど多岐にわたったご意見を頂戴しました。その中でも特に次の三つのご意見が未来の大人に向けて伝えていく大事な点であると感じて提言としてまとめさせて頂きました。

1. 体験を語り継ぐことや本を読むこと
2. 家庭・学校・地域等でのコミュニケーションを取ることに
3. 日頃からさまざまな体験活動を行うこと

これらの事を各青少年団体だけでなく学校や地域での活動に生かして頂ければと考えております。



Ⅱ、提言

1. 話を聞こう

～被災によって見えないものが見えた～

震災以前から同じ状況に置かれていた（高齢者・障がい者・在日外国人）被災の教訓を風化させることなく後に伝える義務を自覚する必要があります。

それを活かし、将来に向けて日常どのような備えを如何にするか。支援者・ボランティアは、課題を抱えた人に出会い、問題解決に向けての支援を行う中で、自らどの様に答えるのかが問われました。

特に被災体験者、高齢者、障がい者、在日外国人とどう向き合ってきたのかを共に考えたいと思います。なぜなら、障がい者、高齢者の問題、在日外国人の問題なども被災によって問題の本質が奇しくも問われましたが、そのことは以前からあったことなのです。

被災直後、多くの市民は必ずと言っていいほど行き場のない苦情や問題を行政に持ち込みます。しかし、それが全く困難だったのが障がい者、高齢者、在日外国人等でありました。日常、どのような関係性を保ち、共生社会を築いてきたのか、その対象となる人が、自らの意志と力で生きるきっかけとなりました。日常生活においては支援する側とそれを受ける側との人間関係があつてこそ支援できますが、被災した人に非日常を生み出したところではやはり代弁者、支援者が必要なのです。そのためには、日常的に地域においてどのような関係性を保っていたのかが問われます。被災された日常孤独に苛（さいな）まれていた高齢者（特に独居老人）、様々な課題を持っておられる障がい者、そして、「心の壁」「言葉の壁」「法の壁」等にぶち当てられた在日外国人は、身近な日々の生活、これからの生活保障については極めて大きな不安を被災時に抱えておられました。

～被災者の現実、その話を聞こう～

人間が人間として人間らしく生きることのできる社会の創造に向けて「顔と顔の見える関係」を築くかが共に被災したすべての人に与えられた大変大きな課題ではないかと思います。

各青少年団体、地域に生きる人々が、小さなことでも「何ができるか」「何をしなければならぬか」を意識して行動していくことが求められています。そのためにも、被災を受けられた多くの体験者、障がい者、高齢者、在日外国人等の話に耳を傾ける機会を設け、「決してあなたをひとりにはしない」という思いを日常的に強く持ち、明日に向かっていかねばと思います。

2. 本を読もう

防災意識を高めるために『本を読もう』と言われれば、難しい専門書や、誰かの経験が書かれたものを探してきて読むことだととらえる指導者が多いでしょう。しかし、急にそのような本に触れたところで、子どもに上手く伝えられるはずはありません。

専門的な知識を身につけるよりも、まずは、本に描かれた世界にひたることです。子どもとき好きだった絵本や物語の中で、ストーリーはほとんど覚えていないのに、食べ物のシーンはすみずみまではっきり覚えているとか、昆虫図鑑のあのページの〇〇虫が大好きだとか、部分的に鮮明に覚えている経験は、誰にでもあると思います。描かれた世界を味わえば、登場人物の気持ちが分かったり（共感）、おかれた状況について考えることができたり（想像）します。

それが、日常生活においても、人の気持ちや、おかれた状況を理解できる力につながります。防災の本についても同じではないでしょうか。

「難しい専門書」、「経験された方の話」、「語り継いでいかなければならない資料」は、たくさんあります。

年齢に応じた本を選ぶことはもちろんですが、子どもと一緒に選び、その本の中で同じ体験をして、意見を交換する。そして、その中から防災について一緒に学ぶことが大切だと考えます。事（災害）が起きた時に、本を通じて行ったコミュニケーションや、本の中から得た知識が役に立ち、行動に移せると思っています。

さあ、本を好きになるところから始めてください。漫画でも。絵本でも。

別世界で遊べる絵本や物語は、つかの間、心を癒し、励ます魔法の力があることも忘れずに。

3. コミュニケーションしよう

(1) コミュニケーションは命を守る

「コミュニケーション」という用語は通常、情報の伝達、連絡、通信のことと理解されています。私たちが行う青少年団体活動では、上記のことは当然ですが、より身近な「意志の疎通」や「心の通い合い」といった意味合いが強くあります。

人間関係の基本は、「互いに理解し合う」ことです。

淡路島の野島断層保存館副館長米山正幸先生のご講演のなかで、「倒壊した家の中から住民が協力し合っておばあちゃんの救出が出来たのは、ここのおばあちゃんはいつも家のこの部屋で寝ているということを近所の住民が知っていたから」という生々しいお話がありました。

もし誰もおばあちゃんの寝場所を知らなかったら、救出出来ていなかったかも知れません。

これは、住民同士に普段からの付き合いがあり、話し合いがあり、助け合いがあったからこそのことではないでしょうか。

「コミュニケーション」という難しい言葉を使わなくても、互いの「心の通い合い」があれば命をも守ることが出来るのです。

(2) 団体活動でのコミュニケーション

団体活動には、それぞれの団体の目的やミッションが定められています。

具体的なプログラムの実施においては、実行委員会などを構成して、準備を進めます。この準備の過程で、A. 活動の計画 B. 役割とその分担などが検討されますが、関係者がより多く話し合えるよう配慮することが大切です。指導者が一方的に指示をして決めるというやり方は好ましくありません。

プログラムの終了後は、必ずふりかえりを持ち、一人ひとりの関係者が、意見を述べる場を設定し、共に考えるという過程を経ることにより、プログラムの質の向上が図れることはもちろん、コミュニケーション力が増し、団体が活性化されます。

(3) 地域でのコミュニケーション

地域には色々の人々が暮らしています。大人、子ども、学生、障がい者、お医者さん、八百屋さん、おじいさん、おばあさん、あかちゃん、学校の先生など、たくさんの知り合いがいますか？ いつも挨拶を交わす人がいますか？ 困っているお年寄りがいたら手助けをしていますか？

すか？ 地域のクリーン作戦やお祭りに参加していますか？ 参加すると、たくさんの知り合いや友達が出来ます。地域の地理や歴史を知っていますか？ 地域のお年寄りからお話をお聞きするのも楽しいことです。

また地域内の神社やお寺を青少年団体や青少年育成団体などのプログラムとして訪問するのも実現したいプログラムです。子どもたちと一緒に地域の地図を作るのは地域を知る最も良い方法です。災害時に避難場所に向かう道を実際に歩いてみる。お菓子屋さんのおっちゃんと仲良くなるとおまけが貰えるかも。

(4) 地域で指導者が行うコミュニケーション

大人と大人、大人と子ども、指導者と子どもの話し合いの場の設定を行い実際に話し合いが行われるように配慮することが大切です。

話の中身は、例えば今度行う夏祭りの出し物についてとか、地域でのスポーツ大会をどんな内容にするかなどです。

また、子どもは大人をどのように見ているのか。反対に大人は子どもたちをどのように見ているのか。案外ここから地域の問題解決の糸口が見えてくるかも知れません。

(5) やっぱりコミュニケーション

人は、一人で生きていくことは出来ません。

家族がおり、隣近所があり、友達や仲間がおり、仕事場があり、外国の人もおりと色々な人々に囲まれて過ごしています。

そんな人たちと、話し合い、学び、遊び、助け合い、共に暮らすことで人間として豊かな人生を送ることが可能になります。

コミュニケーションがなければ、付き合いがなければ、人生は味気ないものとなってしまいます。大切なもの、それはやはり「コミュニケーション」。

4. 街を知ろう

地域を歩きましょう

活動として取り組もう

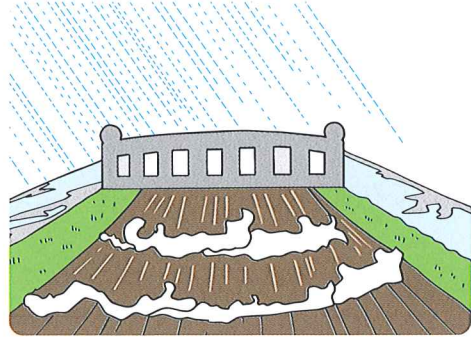
(1) みんなで地図をつくりましょう

- ・学校を中心にみんなの家を描こう
- ・学校の周辺のお店を探して描こう
- ・交番所や消防署、市役所、役場、区役所など公共の建物を探して描こう
- ・病院やお医者さんを探して描こう
- ・自動販売機はどこにあるかな。その内災害の時に飲み物を提供する自動販売機があったかな
- ・消火栓を探して描こう
- ・雨が降ると流れる水が増えたり、流れが速くなる溝や川は
- ・高い建物はどこにあるかな、描いて見よう
- ・工場があるかな

(2) 街の構造を調べよう

活動として取り組もう

- ・坂道は
- ・海は
- ・山は
- ・池は
- ・それぞれは何メートルかな



(3) 街に住む人を調べよう

子どもと一緒に話し合おう

- ・いつも挨拶する人は、顔や名前、家が分かるかな
- ・隣や向いなど近所に住む人をどれくらい知っているかな
- ・お母さんやお父さんが働いている人は、仕事の中味や仕事先を知っているかな
- ・おじいさんやおばあさんがいる人はどこに住んでいるか知っているかな
- ・家の近くのお店の人を知っているかな
- ・街でお祭りやイベント・行事を行っているかな

(4) 街の産業を調べよう

活動で市役所や役場に行って調べよう

- ・主な産業は
- ・農業や林業、漁業は
- ・特産品は何
- ・伝統工芸は
- ・街の名人を探そう

(5) 街の建物を調べよう

地図をつくる時に調べた建物が何をするとところか「調べ活動」をしよう

(6) 避難所や消火栓などを調べよう

避難所や消火栓、防災倉庫、備蓄倉庫などの「調べ活動」をしよう

- ・防災倉庫の中には何が入っている
- ・知っているのは幾つあるかな
- ・名前が分かるかな
- ・使い方が分かるかな
- ・備蓄倉庫には何が入っている
- ・どれくらいの量が入っているかな
- ・地域の何人分で、何日分

(7) 避難経路を歩こう

避難経路を歩く活動をしよう

- ・みんなの避難経路を一緒に歩こう
- ・地震の時は
- ・水害（ゲリラ豪雨）の時は
- ・台風の時は
- ・他の災害の時は



- ・歩きながら気づいたことを話そう

5. 道具を使おう

被災時には、身近な『道具』がとても役立ったという話をよく聞きます。

では、これらの『道具』の名前や使い方は知っていますか？

確認してみましょう！

A 群(道具)



A



B



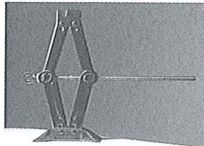
C



D



E



F



G



H



I



J

B 群(道具の名前)

- ① かなづち ② きり ③ のこぎり ④ ペンチ ⑤ つるはし
⑥ ほうき ⑦ ジャッキ ⑧ くぎぬき ⑨ スコップ ⑩ ちりとり

C 群(使い方)

- | | |
|------------------|--------------|
| あ 固い地面やアスファルトを砕く | い 建材を切る |
| う 重たいものを上げる | え ごみを集めて捨てる |
| お 木に穴をあける | か はりがねを切る |
| き ごみを掃く | く くぎを木から取り外す |
| け 穴を掘る | こ くぎを打つ |

※答えは、18 ページをご覧ください。

今回の『講演』や『討議』の中では道具使用についてこんな話もありました。

○倒壊した家屋の撤去作業では『チェーンソー』は役に立たなかった。

釘や針金があるとチェーンソーの刃が欠けて使えず、『のこぎり』や『つるはし』が役立った。(姫路会場)

○人力ではどうしても動かない瓦礫も車の『ジャッキ』を利用することで撤去することができた。普段は車の中にあり、ほとんど利用することもないのだが使ったことのない人もいることに驚いた。(豊岡会場)

○停電で掃除機が使えずにいたときに、おばあちゃんが『ちりとり』と『ほうき』を持って掃除をしてくれた。学校では最近床がカーペットになっていて『ほうき』を使うことが少ないという。せめて家庭では意識して『ちりとり』と『ほうき』を使う掃除をしたい。(神戸会場)



これらのことから、日頃から『道具』に興味・関心を持ち、『道具』を扱う機会を作りましょう！

6. 五感を鍛えよう

(1) 触る・つかむ・持つ

プログラムを実施する中でいろんなものを触ろう
毒(どく)があつたり、かぶれるものは避けよう
子どものアレルギーに気をつけよう

- ・木の肌を触ろう
- ・草を触ろう
- ・虫を触ろう。つかもう
カブトムシやクワガタ虫はどこを持つのかな
トンボをつかもう
- ・カエルをつかもう
- ・石を触ろう
- ・野菜や果物を触ろう
- ・肉や魚を触ろう
生きた魚をつかめるかな

以上それぞれ、どんな違いを感じたか話し合おう

(2) 見る

見た物を絵に描こう、しっかりと見て描こう

- ・景色
- ・野菜や果物
- ・動物や鳥
- ・爬虫類(はちゅうるい)や魚類



- ・人
- ・花や木、草
- ・他様々なもの

(3) 聞く・聴く

活動中少し時間を取って周りの音を聞こう

- ・街の中の音
聞こえた音の中で自然の音はどんな音があったかな
心地よい音は
不愉快に感じる音は
- ・自然の中で
何種類の音が聞こえたかな
鳥の声は
動物の声は
昆虫の声は
自然の音は
人が出した音は

(4) におう

活動中ににおう時間をつくろう

- ・街のにおい
住む地域のにおいは
ゴミのにおいは
工場のにおいは
その他どんなにおいがするかな
- ・花のにおい
- ・果物のにおい
- ・生き物のにおい
- ・魚のにおい
- ・食べ物のにおい
- ・虫のにおい

(5) 味わう

舌で感じよう

- ・様々な食べ物の味は
- ・水の味って地域によって違うかな
- ・川の水の味は
- ・ドングリや木の実をかじろう
- ・渋柿はどんな味
- ・店で売っているのと自然になった果実は味が違うかな



7. 避難訓練をしよう

災害に対処するには、一人ひとりが日頃から意識し備えることが大切です。

災害被害の体験は後世に伝え、教訓を生かし、くり返し訓練して防災・減災に努めましょう。

避難するには・・・

◆素早い判断と適切な行動が取れるよう、くり返し実践的な訓練を行い、対応能力を養いましょう。

- ・避難方法を相談し、家族や友人と確認しましょう。
自分の命を守り、家族の信頼と絆を築きましょう。
隣近所や周りの人に声をかけ、助け合いましょう。



・避難訓練

迷わず速やかに安全な場所に避難できるよう、みんなで避難場所や避難ルートを確認し、実際に歩いて確認しましょう。

・消火訓練

出火防止対策と初期消火をしましょう。

小さい火は、水や消火器で消せるよう、使い方や誘導の方法を定期的に点検し訓練しましょう。



・救出・救護訓練

倒壊家屋などからの救出方法や応急手当の仕方、AED の取り扱いを確認しましょう。

ジャッキやバール、のこぎりやハンマーなどがどこにあるのか確認し、取り扱ってみましょう。



◆自分たちの住んでいる地域の特性に応じた訓練を実施しましょう。

- ・地震、津波、防風、豪雨、洪水、高潮、土石流、地すべり、崖崩れ、密集市街地の延焼火災など、自分たちの住んでいる地域を実際に歩いて確認しましょう。
- ・普段の訓練が、災害時の素早い判断と行動にいきます。できる限り多くの人が参加し、みんなの行動力を高めましょう。

◆災害が発生したときの状況を想定して取り組みましょう。

- ・様々な個人、組織が力を発揮できるよう訓練と準備に取り組みましょう。
- ・隣近所の協力が一番の力になります。学校でも、職場でも、街の中でも自分の周りの人と協力し助け合いましょう。

◆訓練の重要性を家族に伝え、話し合いましょう。

- ・青少年活動で学習し実践訓練したことを、あなたから家族に伝え、みんなで話し合い確認しましょう。

・くり返し学習と実践訓練を重ね、行動力を高めましょう。

◆自主防災組織を活用し、参加しましょう。

・地域には自主防災組織があります。地域内の避難の状況、被害の状況等を収集し、市・町の災害対策本部に報告しましょう。

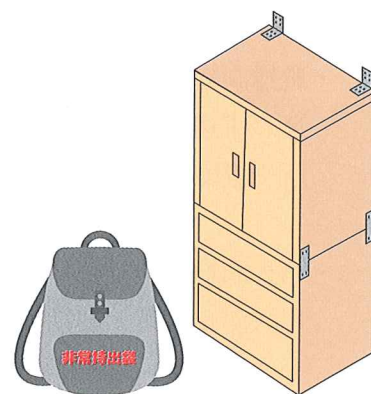


◆対処の方法を身に付けて、災害時に素早く行動しよう。

被害を減らすためには・・・

◆家庭内の備え＝自助

・家具を固定しましょう。
・非常用持出袋を準備しましょう。
・避難場所や避難所、避難経路を決め、家族みんなで確認しましょう。
・自分の命は自分で守る。一人でもちゃんと避難するという信頼関係を家族で築いておきましょう。



◆隣近所で助け合いましょう＝共助

・普段のあいさつや声かけ、災害発生時の防災、減災につなげましょう。
・互いに協力し助け合えるよう、日頃からつながりを大切にしましょう。

わたしたちもできるよ!!

◆子どもたちが協力できることを決めましょう。

・防災マップを作り、自分の地域のことを自分で確かめ、家族や地域の人に伝えましょう。
・小さな子どもたちや、手助けを必要とする人を助けましょう。
・将来地域防災の担い手になりましょう。



◆資機材の使い方を練習しましょう。

避難所に備蓄された資機材の定期的な点検と使い方を習得しましょう。

8. 一人で生活する体験を重ねよう

子どもたちに生活体験をさせましょう。人はどこかで一人で生活しなければならない時があります。その時、体験を通じた知識と技術が試されます。

子ども一人で、あるいは子どもたちだけでの体験の機会をつくりましょう。身近な青少年団体活動に参加させるのもよいでしょう。

体験は特別な環境だけではなく、家庭あるいは地域の中でできることもあります。ほんの少し、日々の生活の一部を子どもたちに「体験させる」のです。洗濯、料理、掃除…大人にとっ

てはごく日常の当たり前すぎて意識しないほどのことであっても、経験のない子どもにとっては未知の「非日常の体験」となり、そこから得られる経験の積み重ねが子どもを大人に近づけていきます。

子どもたちは大人が思っているよりも色々なことができます。良くも悪くもできないのは、大人がそれをさせていないだけではないでしょうか。挑戦させましょう。そして見守りましょう。子どもがわからないことは教えましょう。子ども自身が答えを導きだせるものは考えさせましょう。もし自分もわからないことがあれば、一緒に挑戦しましょう。大人はだれでも子どもの指導者です。

Ⅲ、子どもの頃の被災体験を語る会「記録」

1. 各会場での流れ

時間	作業内容
10:00	開会 あいさつ 委員紹介
10:15	講演
11:15	グループ分け 自己紹介 体験を語り合う 昼食
12:45	グループ別討議 ①経験 ②対応 ③将来のそなえ
15:30	発表(⑩10分×3G) ファシリテーターまとめ
16:15	閉会 あいさつ
16:30	解散

2. 参加者名簿

12月23日 東会場(神戸)			1月18日 西会場(姫路)			1月25日 北会場(豊岡)		
No.	参加者氏名	団体名	No.	参加者氏名	団体名	No.	参加者氏名	団体名
1	尾上 尚司	神戸 YMCA	1	苦瓜 一夫	ボーイスカウト	1	阿部 洋子	ガールスカウト
2	中島 靖浩	ボーイスカウト	2	西脇 龍荘	ボーイスカウト	2	宇上 京子	ガールスカウト
3	桑 英人	ボーイスカウト	3	橋本 晴美	ガールスカウト	3	山本 邦彦	子ども会
4	大城 裕美	ガールスカウト	4	柳田 麻巨	ガールスカウト	4	信部 武史	子ども会
5	安食 照	ガールスカウト	5	大園 香織	ガールスカウト	5	足田 茂樹	子ども会
6	田渕 舞	ガールスカウト	6	海老名麻希	ガールスカウト	6	橋本 忠明	子ども会
7	清水 哲	子ども会	7	米田由佳子	ガールスカウト	7	高階 正夫	子ども会
8	上谷 敏行	子ども会	8	永安 孝行	子ども会	8	榎本 英樹	生涯学習 サポート兵庫
9	浅見 真一	子ども会	9	安積 章仁	子ども会	9	長島 求	ボーイスカウト
10	扶蘇 郁雄	世界青年 友の会	10	秋山 朋子	公財兵庫県 青少年本部	10	原田 伸一	ボーイスカウト
11	吉田 成男	公財兵庫県 青少年本部	11	山本 智也	神戸 国際支縁機構	11	山田 拓実	ボーイスカウト
12	西田 怜奈	神戸 国際支縁機構	12	森下 裕子	ガールスカウト			
13	中山満州雄	兵庫県少林寺 拳法連盟	13	寶角 真季	ガールスカウト			
14	坂口 博昭	世界青年 友の会	14	楠元 翔子	神戸 国際支縁機構			
15	田中 英将	兵庫県少林寺 拳法連盟	15	原田 知典	ボーイスカウト			

実行委員

No.	参加者氏名	所 属	No.	参加者氏名	所 属	No.	参加者氏名	所 属
1	山口 徹	(前)兵庫県 教育委員長	1	山口 徹	(前)兵庫県 教育委員長	1	山口 徹	(前)兵庫県 教育委員長
2	速水順一郎	兵庫県青少年 団体連協会長	2	速水順一郎	兵庫県青少年 団体連協会長	2	速水順一郎	兵庫県青少年団 体連協会長
3	岡本 光司	世界青年 友の会会長	3	岡本 光司	世界青年 友の会会長	3	岡本 光司	世界青年 友の会会長
4	日野健太郎	(一社) 野外活動協会	4	日野健太郎	(一社) 野外活動協会	4	日野健太郎	(一社) 野外活動協会
5	西山 安子	(一社)兵庫県 子ども会連合会	5	西山 安子	(一社)兵庫県 子ども会連合会	5	西山 安子	(一社)兵庫県 子ども会連合会
6	岡本 由貴	(一社)ガールスカ ウト兵庫県連盟	6	岡本 由貴	(一社)ガールスカ ウト兵庫県連盟	6	岡本 由貴	(一社)ガールスカ ウト兵庫県連盟
7	南 秀生	日本ボーイスカウト兵 庫連盟事務局長	7	南 秀生	日本ボーイスカウト兵 庫連盟事務局長	7	南 秀生	日本ボーイスカ ウト兵庫連盟事務局長
8	仲野 幹	(公財)兵庫県 青少年本部主幹	8	仲野 幹	(公財)兵庫県 青少年本部主幹	8	仲野 幹	(公財)兵庫県 青少年本部主幹

3. 協議した報告内容

【東会場(神戸)のまとめ】

「何を学び、何に気づくか」

～これから何ができるのか、何をしたいのか、何をしなければならないのか～

講師：山口徹氏（前兵庫県教育委員会委員長・県青少年団体連絡協議会顧問・神戸YMCA名誉主事）

震災2日前から韓国青年をホームステイして下さっていたYMCA会員宅。家屋の下敷きになり、目の前でご主人を亡くされ「韓国の青年ではなく、主人でよかった」と茫然とたたずみ、言われたお連れ合いの言葉に涙した。

震災発生後三日目にどの様な協力ができるか神戸市役所、兵庫県庁を訪ねるもパニック状態で何ら体制が整っていない、民間青少年団体独自として救援本部立ち上げを決意する。

当時YMCAの責任者として心苦しかったことは、被災者であり、地域に奉仕するボランティアであり、YMCAの活動をいち早く再開しなければならないという3つのペルソナを持って日々献身的に働いてくれている職員の姿に感謝しつつ、共に汗したことは忘れられない。この体験を通して、職員の使命感が強化されていったことは大変感謝であった。

※「ペルソナ」とは、キリスト教で、三位一体論に用いられる概念。本質において唯一の神が父と子と聖霊という三つの存在様式をもつことを意味する。位格。位。格身。

YMCAの救援・復興活動

ボランティア（一般の方を含め述べ7万人が参画して下さった）の役割と責任を絶えず確認しつつ、地域並びに人々のニーズの変化に対応してその働きをしていただいた。

そのほとんどは「御用聞き作戦」といい、全国YMCAを通じて贈られた自転車500台を活用して、独居老人、障がい者、在日外国人を対象として実施したことであった。

～何を学ぶのか～

基本的に「人間とは」を再度問う。社会的存在として人格を中心に考えた人であり、支え合う、人と人の間に存在するということを救援、復興活動の基盤とすることが大切である。震災という非日常性に突然陥った時、一瞬多くの人は勿論うろたえたのであるが、人を助けるのは人しかいないという思いの中で行動し始めた。人間は基本的に心を備えているからである。しかし、自分の身・命は自分で守ることが原則であること、被災者の自立、自律を尊重することを忘れてはならなかった。

“言われてもしない、言われなくてもする” 民間人として、民間青少年団体としてのスピリットとして、「言われてもしない、言われなくてもする」という姿勢を大切にしっかり持ちながら、その時々状況判断をした。

救援、復興活動においては、“顔と顔の見える関係” づくりを目指した。そして、生きる喜び、遊ぶ喜びがいっぱいになる体験をすることが子どもの心を豊かにし、結果的には「共に地域で生きる」ということを実感出来るのではないかと。既存の自治会、老人会、婦人会、民生委員、児童委員をはじめ地域にある民間青少年団体などと日常的に協働していく重要性が問われたのではないかと。

～自立した市民とボランティア活動～

震災直後、多くの市民が持って行き場のない苦情や問題を行政に持ち込んだ。しかし、行政も事があまり大きすぎてなすすべがなかった。日常から自立した市民があつて行政があつたな

ら、混乱はもっと少なかっただろう。問題を抱えている人は、最終的には、その人自身が解決しなければ本当の解決にはならないということである。つまり、それは、個人の尊厳そのものであり、自立した市民にとって最も大切なことである。行政に対して市民は、ずっと他力本願な姿勢を持ち続けていたのではないだろうか。普段から市民一人ひとりが自立しておく必要があることを明確にした。

私助、公助の限界性を知る。そこから共助が生まれた。

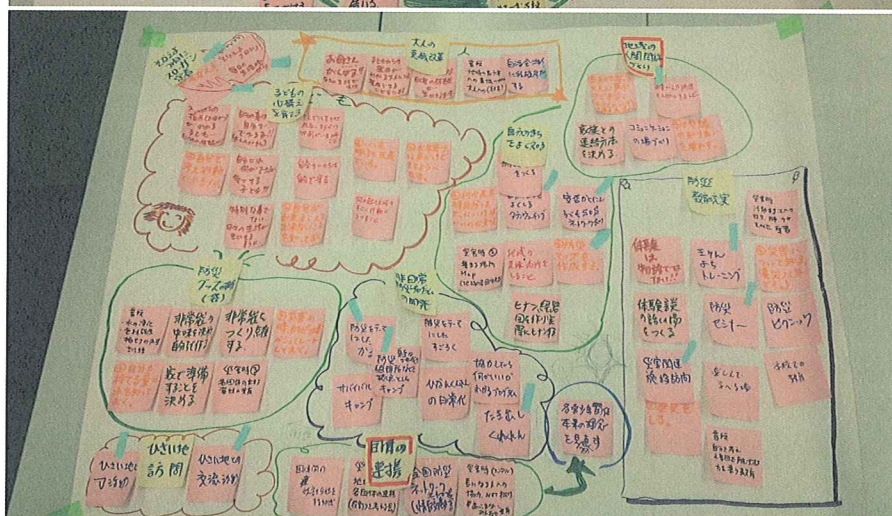
大切な3つのT — “Tears” “Talk” “Time”

涙を流し、悲しみを誰かと分かち合い、時間をかけて傷を癒していく。その過程がとても大切なことである。それは、いのちを回復していく過程だと言える。

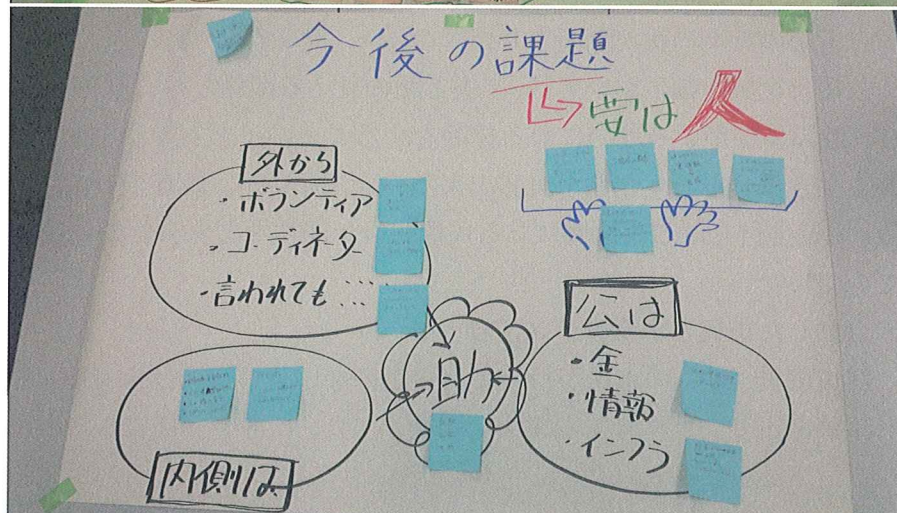
A グループ
発表資料



B グループ
発表資料



C グループ
発表資料



【西会場(姫路)のまとめ】

「野島断層からのメッセージ～震災のいのち・人とのつながり～」をテーマに、北淡震災記念公園・震災の語りべ「米山正幸(こめやま まさゆき)」氏に講演をいただきました。

現在は、野島断層保存館副館長をされていますが、当時は北淡町富島の消防団員として救助活動や救援物資の配布などに活躍された自らの体験を熱く語って頂き、後世に地震に備えることの大切さを伝えて頂きました。

震災当日の自らの体験や町の様子、復旧・復興などを様々な立場や視点で語って頂き、自ら神戸まで行き、撮影したビデオ等も紹介して頂きました。

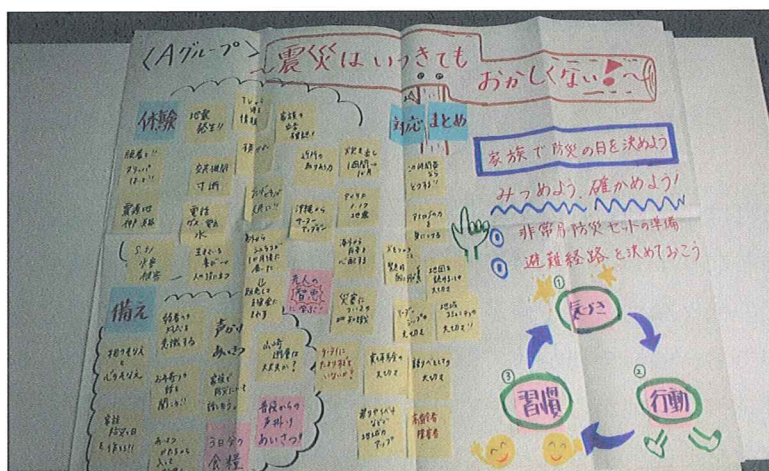
米山様の体験から得た教訓は、下記の4項目でしたが具体的に経験したことを紹介して頂き、「語ること」と「聞くこと」の大切さを痛感しました。

- ① 隣近所とのコミュニケーションの大切さ
- ② 防災意識の重要性(備え、訓練、命をどうやって守るか)
- ③ 家屋の耐震、住民への情報伝達方法の確立、災害に強いまちづくり
- ④ 災害後のこころのケアの重要性

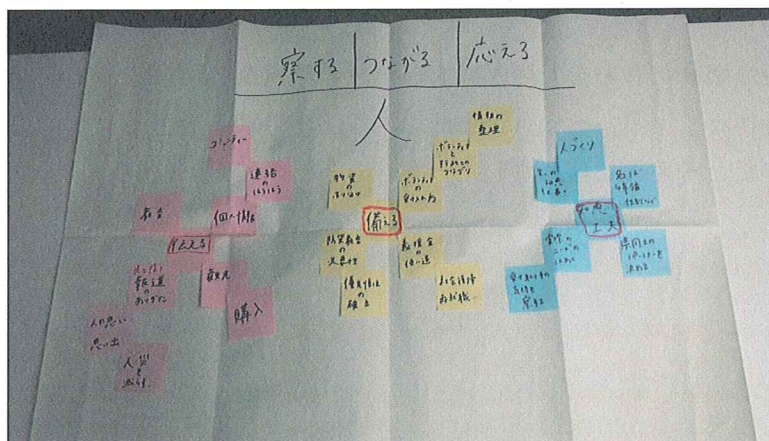
倒壊家屋の救出作業でのチェーンソーが釘や針金があるため使えない事、「のこぎり」や「つるはし」が役に立ったこと。また、倒壊家屋の中からお年寄りを救出することができたのは、日頃の民生委員と社協の名簿があったこと、そして地域でのコミュニケーションが取れていたことから、お年寄りの寝所の場所を知っていたことが救出できた要因との説明があった。

今回の講演で地域での日頃のコミュニケーションの大切さと防災意識を持って常に備えることの重要なことが理解されました。

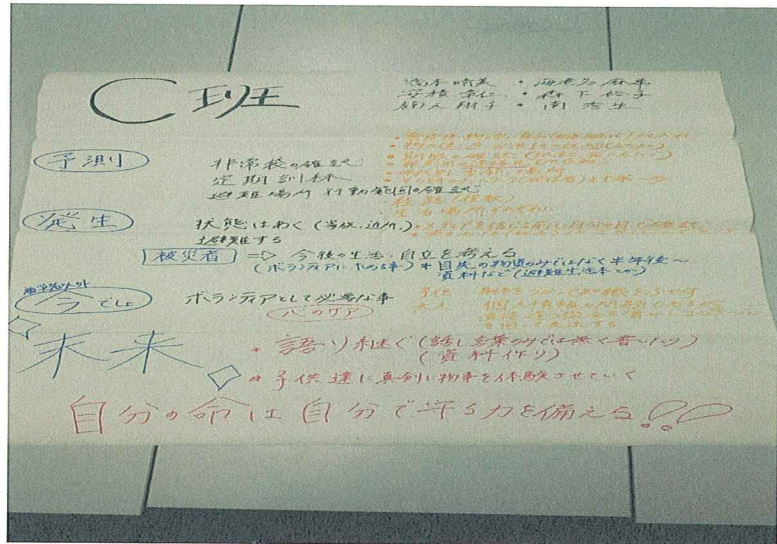
A グループ
発表資料



B グループ
発表資料



C グループ
発表資料



【北会場(豊岡)のまとめ】

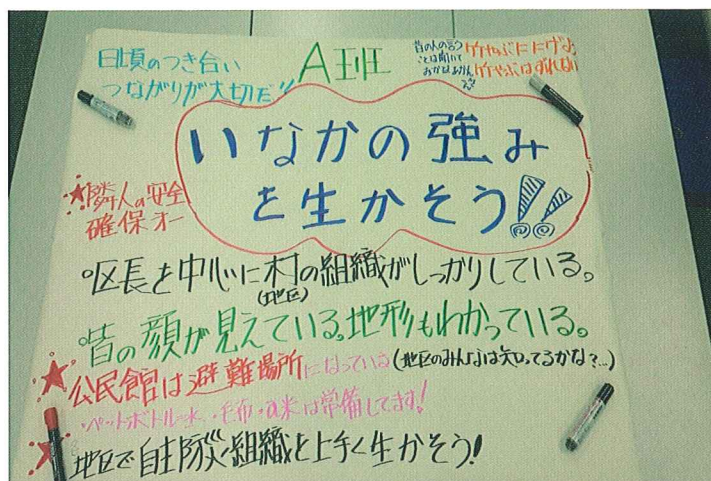
「台風 23 号直撃の忘れない記憶」をテーマに、株式会社シルク温泉やまびこ代表取締役で前豊岡市副市長・但東町長の「奥田清喜（おくだ せいき）」氏にご講演いただきました。

他会場とは異なり、震災被害の少ない兵庫県北部では、テーマとして平成 16 年の台風 23 号が挙げられました。この台風の豪雨により、河川の増水による決壊・崩落・浸水、床上床下浸水、土砂崩れなどが発生し、大きな被害が出ました。当時、但東町長として陣頭指揮を取られた体験を、写真を交えながら、被災当日の初期対応から災害後に至るまで奔走された経験を行政の立場として親しみやすい語り口で語っていただきました。

但東町は山間部の町であり、その生命線でもある道路が土砂崩れや崩落ですべて寸断され、ほぼ孤立状態となりました。停電に電話の不通、ライフラインが寸断され、被害状況の把握もままならない状況での様々な判断。連絡がうまくいかず、物資が思ったように届かないなどのマニュアルが通用しない中でも、機転を利かせて緊急車両のためにサイクリングロードを利用するなどの発想の变え方。被害確認後、各地から支援を寄せるために報道機関への取材依頼など、市民には気づかないような行政の苦労を追体験することができました。

被災後に壊れたものを元通りにするだけの「復旧」ではなく、元以上に災害に耐えうる町とコミュニティを作る「復興」への意識と取組みは、あらゆる災害に対して負けずに意識し続けなければならないものだと考えさせられました。

A グループ
発表資料



B グループ
発表資料



C グループ
発表資料



【道具の名前と使い方の回答】

答え合わせ【 A群 — B群 — C群 】

A…⑤…あ	B…④…か	C…③…い
D…②…お	E…⑥…き	F…⑦…う
G…①…こ	H…⑩…え	I…⑧…く
		J…⑨…け

結果はいかがでしたか!?

IV、実行委員会メンバー



実行委員長	南 秀生(日本ボーイスカウト兵庫連盟 事務局長)
委員	山口 徹(前兵庫県教育委員長)
	速水順一郎(兵庫県青少年団体連絡協議会会長)
	仲野 幹(公益財団法人兵庫県青少年本部主幹)
	岡本 光司(兵庫県世界青年友の会会長)
	日野健太郎(一般財団法人野外活動協会)
	西山 安子(一般社団法人兵庫県子ども会連合会)
	岡本 由貴(一般社団法人ガールスカウト兵庫県連盟)